

なんと坂本姓のルーツ?豪族・坂本氏のふるさとへ ～飢野原の土蜘蛛伝説から平家の末裔・高橋家住宅まで～

阪本の禪寂寺は出土した寺院の瓦から飛鳥時代の創建と推定され、豪族・坂本氏の寺院(坂本寺)だったといえます。発掘調査では法隆寺式の七堂伽藍であったことが確認され、境内には今も巨大な塔刹柱礎石が残っています(大阪府文化財)。戦国時代には坂本城があったといいますが、信長軍の兵火によって焼失し、詳細は不明です。坂本氏は元は紀氏でしたが、和泉郡坂本郷を所領地としたので、坂本姓を名乗りました。じつは日本全国にいる坂本姓のルーツのひとつといわれています。その阪本から土蜘蛛伝説が残る伏屋町や、高橋家住宅を有する池田下町などを巡ります。

池田地域の地黄御園

地黄というのは中国原産のゴマノハグサ科の多年草です。奈良時代に我が国に入ってきたと思われませんが、増血、解熱、強壮に効く漢方薬で、かつては正月に地黄の根茎を刻んで粥に入れる「地黄粥」を食すれば邪気を払うといわれました。この地黄を栽培する「地黄御園」が和泉国にあり、池田地域の山深・神下の西南の槇尾川沿いに「地黄里」と呼ばれる場所があります。平安時代の保安4年(1123)には池田地域の地黄栽培の関係者が殺人事件を起こしたという記録などもあります。貴重な薬草なので権利関係などでトラブルも多かったようです。

⑨高橋家住宅(非公開)

江戸時代中期に建てられたとされ、国指定重要文化財です。高橋家は平長盛(平清盛のいとこ)の子孫で平家の落人だったという伝承があります。鎌倉・室町時代の古文書を数多く所有し、中世には池田庄一帯を領し、戦国時代には秀吉の朝鮮出兵にも従軍しています。江戸時代に入ると帰農し、池田下村の庄屋を代々、務めました。その頃は屋敷の前庭が村の年貢を寄せる納所場として利用されたといえます。

⑧池田中村八幡宮(霊石)

明治42年(1909)に池田郷内の小さな祠やお社が廃されたときに集落の住民の中川氏が霊石を持ち帰ってお祀りしたといえます。その後、中川氏が大阪に転居すると、門林氏が霊石を祀るようになりました。「神功皇后の尊石」「八幡神社の母公の石」「頭の神様」として厚く崇敬され、門林氏には計り知れぬ加護がありました。これほどの霊石は私有するのではなくて多くの方に礼拝されるべきであると、昭和56年(1981)に池田中村八幡宮に遷座しました。

飢野原(伏屋町)の土蜘蛛伝説

神武天皇の時代に大熊・小熊と名乗る土蜘蛛がいました。そこで天皇から派遣された道臣宇都彦(みちおみのうつひこ)は、大綱を張って土蜘蛛を包囲し、百日間、兵糧攻めを行いました。結果、土蜘蛛は飢えて死んだので「飢野原」の地名がつけました。『清輔朝臣集』の「秋風にうえ野の薄うちなひきほのめかしつるかひやあらなん」(藤原清輔)や『夫木和歌抄』の「雨晴れて朝吹く風に和泉なるうえ野の萩はちりや過ぎなん」(衣笠内大臣)の和歌が飢野原を歌ったものとして伝えられていますが、この飢野原が現在の伏屋町界隈といえます。

⑥自作農創設碑(伏屋町老人会館前)

元禄年間に伏屋氏(万町村の大庄屋)が伏屋新田を開拓しましたが、享保年間に坪井村の大庄屋・澤氏の所有に変わりました。伏屋氏の娘が澤家に嫁ぐ際に持参金として譲られたという伝承もあります。その後、大正15年(1926)に澤氏と交渉し、土地の権利が7万5000円(当時の公務員の初任給は月給30~50円ほど)で伏屋新田の小作人たちに譲られることになりました。念願の自作農民になった記念碑が伏屋町老人会館前にあります。

⑤杉谷乗馬クラブ

昭和39年(1964)に創設されました。長い歴史と伝統、競技馬場や屋内外複数の馬場など、充実した施設を誇る関西屈指の乗馬クラブです。日本馬術連盟公認競技の「大阪グランプリ」も開催されます。

①阪本九頭神社

戦後の宅地化開発などでなくなってしまいましたが、阪本町には戦前、7つの祠がありました。「阪本の七神さま」と呼ばれて、昔の人は、これらの7つの祠をお参りして日々の生活の安泰や病気平癒の祈願をしたといえます。阪本九頭神社は別名「新堂の神」「賽の神」と呼ばれ、七神さまのひとつです。

②禪寂寺

本堂にご本尊の薬師如来がいますが、脇侍の阿弥陀如来座像(平安時代のものと推測されています)は干ばつになると集落の人が池に投げ込んで、雨乞いをする風習があったといえます。

③郷荘神社

創建年代は不明ですが、坂本氏の産土神として崇められたといえます。古くは郷荘大宮祇園社や八坂大明神と呼ばれていました。「郷荘」とは坂本郷全体が寄進されて荘園となったことに由来します。三間社入母屋造の本殿と安土桃山時代の天正7年(1579)に屋根を葺き替えた際の棟札は、ともに市指定文化財に指定されています。本殿の創建は大永年間(1521~27)と考えられています。和泉市内最古の木造建築です。

④目塚古墳

直径17メートルほどの6世紀末ごろの円墳です。かつて、この辺りは「目塚(さかんづか)」と呼ばれていましたが、江戸時代に万町村の伏屋氏が土地開発した際に人骨や古い刀が出土しました。伏屋氏は「古代に目(さかん)と呼ばれていた、律令制時代の国の四等官にあたる役職の人の墓だろう」と考えて「目塚之碑」を建立しました。お参りすると眼病に効くとされ、『和泉名所図会』にも登場します。

まち歩きマップ「和泉そぞろ」は「いずみ市民大学」の「観光おもてなし学科」の資料として作成されました。掲載されている情報は令和7年(2025)12月現在のものです。和泉のまち歩きの際にご利用ください。

■プロデューサー | 陸奥賢(観光家/大阪まち歩き大学学長) ■コーディネーター | 宝楽陸寛(NPO法人SEIN/コミュニティLab所長) ■イラスト&マップ制作 | フジワラトモコ ■協力 | いずみ市民大学観光おもてなし学科受講生(あんどう/おち〜/葛上健次/クワハラ/shiro/野口千奈/はっとりまさよ/林知子/福井翔也/町田文平/はるパンダ/山田鈴代/山出弘)

和泉黄金塚古墳の頂から眺めてみれば ～幻の暦「信太暦」を作った陰陽師・舞大夫のふるさとへ～

和泉が誇る国史跡に「和泉黄金塚古墳」があります。卑弥呼が魏に使いを送った「景初三年」(239)の銘を持つ銅鏡が出土して全国的にも注目されました(国の重要文化財に指定され、現在は東京国立博物館に保管されています。)北信太駅から不思議な狐伝説が残る菩提寺、舞大夫という陰陽師がいた舞町などを巡ります。※マップ解説は「いづみ市民大学」の受講生と現地をリサーチし、また関連資料などを参考にしていますが、専門家によって多様な意見があります。真実はあなた自身が現地を訪れて確認してみてください。

1 北信太駅

昭和7年(1932)、阪和電気鉄道(昭和15年に南海と合併。昭和19年に国有化。現・JR 阪和線)の葛葉稲荷停留所として開業しました。駅東口に藤原重夫作の絵『葛の葉子別れ』が掲示されています。安倍晴明の母・葛の葉の正体が信太の森の白狐だとバレてしまい、「恋しくば尋ね来て見よ和泉なる信太の森のうらみ葛葉」と歌を書き残す場面です。藤原重夫(1940～)氏は和泉市出身の画家、僧侶で高野山などで数多くの仏画を手掛けています。

2 信太小学校 (信太城跡? / 兵隊先生・青木一)

明治7年(1874)に太町・光受寺に小学校が開校し、これが信太小学校のルーツとなります。学校敷地にかつて「城(じょう)」という字(あざ)があり、信太城跡地と推測する人もいます。また昭和7年(1932)に青木一が代用教員として赴任しました。民俗学に造詣があり、民俗学者・宮本常一(一時期、北池田小学校で教員をやっていた)と親交を結び、一緒に舞村(現・舞町)の藤村家を訪れて「和泉暦」(舞暦)の版木を調査しています。青木は信太小学校の同僚・山田柳と結婚しましたが戦争中、中国戦線から夫人にほぼ毎日、葉書を送り続けて「兵隊先生」と呼ばれました。また手紙は『一日一信 戦地から妻への1600通の葉書』として出版されています。戦場の夫から妻に送られた日本で一番長く続いた軍事郵便といわれています。

3 菩提寺

『泉州信太邑霧林山菩提寺地蔵尊畧縁起』に以下のような地蔵堂の霊験が記録されています。昔、赤井信濃守という人が死別した妻の養育で熊野街道を巡礼していると道中、絶世の美女と出会って夫婦となります。丸雪、初雪、村雨という三姉妹が産まれましたが、ある日、娘が「母さまの後ろの尻尾が怖い」と言い出します。実は母は信太狐の化身で正体がバレた母は悔やみながら信太森へ去りました。信濃守と娘たちは母を探しに行くと菩提という所で地蔵堂を見つけ、「母に会わせて下さい」と祈るとお堂の後ろから母が現れました。娘たちは母に縋りつこうとしますが母は無言で去り、森へ消えます。信濃守と娘たちはもう二度と母とは会えないと悟り、近くの取石池に卒塔婆を立てて母を弔ったといいます。

4 北部リージョンセンター

集会室、和室、会議室、調理実習室、多目的室、図書室、グラウンドなどがあります。

5 井阪硝子製作所

ランプワーク(炎を使いガラスを成形する技法)で毎年、干支に因んだガラス細工を作って人気です。またトンボ玉は「Japanese Lamp Beads」と呼ばれてヨーロッパ、アメリカなど海外でも親しまれています。ちなみに和泉の地場産業「いづみガラス」は2024年に国(経済産業省)の伝統的工芸品に指定されました。

10 和泉黄金塚古墳

古墳時代前期(4世紀)頃に築かれたとされる全長約95mの前方後円墳です。太平洋戦争時に塹壕が掘られ、そこで副葬品が見つかり、戦後に発掘調査されると粘土で覆われた巨大な木棺が3基見つかり、中央に女性、左右に男性が葬られていました。

9 熊野街道(小栗街道)碑

高石市が設置した熊野街道の案内板があります。

8 取石池(とろすいけ)跡

(現・クリーンセンター付近)

かつて当地に取石池がありました。名所として知られ、『万葉集』にも「妹が手を取石の池の波の間ゆ鳥が音異(ねけ)に鳴く秋過ぎぬらし」の歌が収録されています。また『続日本紀』によると神亀元年(724)に聖武天皇が紀伊行幸の帰途、「取石頓宮」を訪れたとあります。池は灌漑用水として利用されていましたが昭和16年(1941)に光明池の完成と食糧増産のために埋立てられて水田化しました。クリーンセンターに向かう道の途上に高石市が設置した取石池跡の案内板があります。

7 舞町会会館 (舞大夫と信太暦)

舞町(舞村)には、かつて聖神社の祭礼に舞を奉納する舞大夫が住んでいました。彼らは陰陽師でもあり、暦(信太暦、舞暦、泉州暦)を販売していたといわれています。暦研究家の渡辺敏夫と民俗学者の小谷方明は舞大夫の末裔・藤村義政の夫人ヨシエへ聞き取り調査を行い、「聖神社には3人の大夫があり、その中に藤村家があった。先代の甚三郎はそのひとりであった。」と記録されています。藤村家は安倍晴明の子孫である土御門家から許可状をもらい、陰陽師や暦販売の活動を行っていたといわれています。

6 嶋田直栄生誕の地

嶋田氏は元は嶋津(島津)氏といって薩摩出身でしたが、島津公が一向宗を弾圧した際も棄教せず、信仰を守って薩摩から高石・土生に居住した一族といえます。菜種油の商売などで財を成して高石の名族となりましたが、西南戦争のときに世間体を慮って嶋津から嶋田に改姓しました。嶋田安次郎(明治18年・1885～昭和7年・1932)は父母に孝行した教育者として有名で昭和5年(1930)には映画『輝ける孝子 嶋田安次郎先生』が作られ、「昭和の二宮尊徳」と褒め称えられました。嶋田直栄はその安次郎の息子で「阪和鳳自動車学校」「阪和鳳自動車工業専門学校」の創業者です。

